
学内活動報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂大学保健看護研究 7
P.74-79 (2019)

平成 30 年度第 9 回 FD 研修会報告

Report of the 9th Faculty Development training in 2018

佐野知世* 小川典子* 高橋智子*
 SANO Tomoyo OGAWA Noriko TAKAHASHI Tomoko
 門脇玲子* 浦川加代子*
 KADOWAKI Reiko URAKAWA Kayoko

要 旨

本学部では、学生が主体的に学ぶための工夫としてアクティブ・ラーニングを取り入れた授業内容を行っている。今年度は、「アクティブラーニングの実践報告 (1)」をテーマに、本学の教員 3 名より、アクティブ・ラーニングの実践報告を行った。本学で行っているアクティブラーニングの実際を聞く貴重な機会となった。午後は本学教職員、本学学生、他学部及び系列病院からの参加者の意見交換を行い、今後の教育活動に活用し、教育改善および教育力向上を図ることができる機会となった。

索引用語：実践報告、FD 研修会、アクティブ・ラーニング

Key words : Practical report, FD training, Active learning

1. はじめに

今回の FD 研修会は、アクティブ・ラーニングの実践報告の第一弾として、本学の教員 3 名による実践報告を行った。本学教職員および学生はもちろん他学部や系列病院からの参加があった。

教員 3 名の実践報告の後、午後の意見交換を通じて多面的な視点から学生が主体的に学ぶための工夫や教育力向上を図ると共に、相互に研鑽・交流する機会となった。

II. 実践報告

テーマ：「アクティブラーニングの実践報告 (1)」

目的：

- ①アクティブラーニングの実践例についての報告およびディスカッションを通して今後の看護教育活動に活用し、教育改善および教育力向上を図ることを目的とする。
- ②学生および本学他の教職員間の意見交換を通じて、多面的な視点から学生が主体的に学ぶための工夫や教育力向上を図ると共に、相互に研鑽・交流することを目的に実施する。

実施日：平成 30 年 8 月 2 日 (木) 10:00 ~ 16:20

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

(Nov. 9, 2018 原稿受付) (Jan. 18, 2019 原稿受領)

参加者：本学教職員 28 名、順天堂医院職員 2 名、
 スポーツ健康科学部教員 1 名、順天堂大学静
 岡病院 1 名、本学部学生 12 名

研修スケジュール：

時 間	内 容
10:00 ～10:15	開会のあいさつ 学外参加者の自己紹介
10:15 ～10:45	「アクティブラーニングの実践報告(1)」 ①「母性看護学におけるアクティ ブラーニングの検討」 母性看護領域 古川 亮子 先生
10:45 ～11:15	②「在宅倫理教育におけるアクティ ブラーニングーディベートにチャレ ンジしてー」 在宅看護領域 藤尾 祐子 先生
11:15 ～11:45	③「マインドマップを活用した地域 診断～実習と演習を関連させて～」 公衆衛生看護領域 岩清水 伴美先生
11:45 ～13:00	昼食 移動・休憩
13:00 ～14:45	グループで意見交換 (6 グループ) テーマ：「 <u>今後の授業へのアクティ ブラーニング活用の可能性・課題</u> <u>実践報告の内容を踏まえ、今後のア クティブラーニングの意見交換</u>
14:45 ～15:00	移動・休憩・発表準備
15:00 ～16:00	各グループ発表 1 グループ 9 分間 (発表 7 分・質疑応答 2 分) 講評 (大熊 泰之 学部長)
16:00 ～16:20	コーヒブレイク アンケート回収 解散

III. 実践報告

本学教員 3 名より、アクティブラーニングの実践に
 ついて報告がされた。

①「母性看護学におけるアクティブラーニングの検討」

母性看護領域 古川亮子先生

学生を複数のグループに分け、グループで講義の資
 料を作成し、学生自らが講義を行う反転授業の報告が
 された。学生が講義資料を作成するにあたり、資料は
 パワーポイント 1～3 枚程度とし、全ての学生が発言

できるように分担している。学生が作成した講義資料
 を教員が何度も添削し、授業に臨んだ。

全ての科目で行うのは学生にとっても教員にとつ
 ても負担が大きく課題は残っているが、自ら学び講義を
 行うことは学生にとって大きな学びとなった。

②「在宅倫理教育におけるアクティブラーニングー ディベートにチャレンジしてー」

在宅看護領域 藤尾祐子先生

パラメンタリーディベートの手法を用いたアク
 ティブラーニングについて報告された。ディベートと
 は、「一つの課題に対して 2 チームの話し手が肯定す
 る立場と否定する立場に分かれ自分たちの議論の優位
 性を利き手に理解してもらうことを意図として議論す
 るコミュニケーション形態」である。前半は授業時間
 内で在宅看護に求められる倫理性、倫理的課題及び葛
 藤と訪問看護師の対応、生命・医療倫理の 4 原則に
 ついて講義を行い、後半は胃瘻造設の是非について本
 人の意向と家族介護者の迷いから、肯定的意見、否定
 的意見を個人ワーク、グループワークし、全体で肯定
 側、否定側、審判と分かれてディベートを行ったこと
 が報告された。学生は、ディスカッションには慣れて
 いるが、ディベートにはルールを理解や戸惑いがあっ
 たが、自分と異なる意見を聞くことや論じることの難
 しさを学ぶことができた。

③「マインドマップを活用した地域診断～実習と演習 を関連させて～」

公衆衛生看護領域 岩清水伴美先生

学生にとって初めて地域診断の機会となる演習にお
 いて、マインドマップの活用を試みたことが報告され
 た。マインドマップとは、概念地図法の一つで、思考
 の整理や統合に適しており、ビジネスや学習のための
 ツールとして世界中で活用されている。絵を描くこと
 が苦手な学生への配慮が今後の課題としてあるが、地
 域診断演習の目的である「人々の暮らしに関連する情
 報を整理・統合」することができた。

どの報告においても、参加した教員より、本学の教員が取り組んでいるアクティブラーニングの実際を知ることができ大変参考になったとの意見が多かった。また、授業を受講した学生が本研修会に参加していた。アクティブラーニングを行った感想や困難な点など学生からの貴重な意見を聞く機会となった。

IV. 実践報告の内容を踏まえ、今後のアクティブラーニングの意見交換

テーマ：「今後の授業へのアクティブラーニング活用の可能性・課題」

午後は、6つのグループに分かれ、実践報告の内容を踏まえ、今後のアクティブラーニングの意見交換を行った。

1. 実践報告の感想・意見交換

A グループ：

学生

- ・アクティブラーニングは学生が主体的にやらなければ始まらないと思っていた。教員は楽だと思っていたが、教員が裏でとても準備していることを知った。
- ・他の学生が教員の努力を知ったら、もっと授業に真剣に取り組めると思う。
- ・アクティブラーニングとは認識しないままに授業をしていたことを知った。
- ・グループワークをする際に積極的に取り組まない学生の存在がある。
- ・発言をしなくても考えていない訳ではない。発言をしていなくても考えている人もいる。それはアクティブラーニングをしているといえるのではないか。

教職員

- ・マインドマップに関して、自分の思考の整理にもなる。学生は、同じ経験をしていても違う考えを持っていることを知ることができる。
- ・学生が他の学生に教えるということは、自分の学習のためになる。

- ・学習方法を学ぶことが重要であり、本学の教員の取り組みが知る機会は貴重である。
- ・グループワークをする際に積極的に取り組まない学生の存在が懸念される。
- ・ディベートの題材選びがとても難しい。しかし、答えのないテーマだからこそ、思考が活発になる。

B グループ：

学生

- ・反転授業を受けた。準備に苦労したが、自分で授業をすることはいいものだった。
- ・ディベートは、経験が少ないため手法などに興味がある。
- ・マインドマップは、可視化できて有効だった。
- ・反転授業では、自分で調べて教えるので頭に残る。マインドマップは、絵に描いてみて理解できる部分があったが、絵が苦手な学生には難しかった。
- ・今までディスカッションはしてきたが、ディベートを行う機会はなかったため、やってみたい。

教職員

- ・反転授業は、準備・後の処理が膨大だと思ったが、学びたいと思った。ディベートでは横断的な教育の難しさを感じた。多様な意見を知ることは大切だと思った。
- ・アクティブラーニングは理想的だが、授業時間の校正及び評価の難しさを感じた。学生の準備ができれば他領域でもやってみたいが、ディベートをするには学生の人数が多く難しい、対立意見も難しいと感じた。
- ・反転授業は、ICT活用がされており、院内教育に活かしたい。また、ディベートを取り入れたい。マインドマップを学んでツールとして身につけたい。
- ・アクティブラーニングは、単発で終わってはいけないため、次に活かしていく難しさがある。領域内で縦断的に、活かしていきたい。
- ・ディベートの実際を見てみたい。マインドマップは、

地区診断では有効であるが、絵を描くのが苦手が学生には難しい。

- ・実践報告により共有でき、アクティブラーニングに対する関心が高まった。

C グループ：

学生

- ・グループワークは自分たちで調べるため、勉強になるが、大人数での発表会は、参加する学生と人任せにする学生が必ずいる。参加する学生はいつも決まっている。しかし、評価はグループとしてされるため納得がいかない。
- ・演習や事例を通して習ったことは、講義の内容より覚えている。
- ・講義で指名され発表することは、その時は不快に思うが後に自分のためだったと気づくことができる。
- ・アクティブラーニングは、行っている最中は大変である。しかし、普通の講義より覚えていることが多くやって良かったと思える。

教職員

- ・演習や事例を通して習ったことは、講義の内容より覚えていることが多く効果的だったのではないかと。
- ・相手を褒めることも必要だが、ディベートのように否定的な意見を述べることもお互い学びあえるため必要である。
- ・教育する側は、新人看護師や学生に課題を課すことに対して、負担が多すぎるのではないかと考えていた。しかし、今日の報告を聞いて学ぶ時期に学ばなければ必要なことができなくなるのではないかと考え直す機会となった。

D グループ：

学生

- ・反転授業では、グループによって、テキストを読んでいるだけの発表もあった。
- ・教員が行う講義では、教科書+αの内容や経験談もある点が良く、学生としてはそのようなことを聞き

たい。

- ・ディベートは感情的にはなるが、第三者として判断し教えるため、後々の学生間の人間関係に影響することはなかった。

教職員

- ・オムニバスの講義の場合、自分だけが担当するわけではないので難しい。
- ・ディベートは倫理観のように両面からみる時には有用であるが、慣れていない場合には個人の先入観が入りやすい。
- ・ディベートには訓練が必要だが、逆の立場で考える訓練になる。
- ・本学のIT機器やAV機器では、ICTを活用した授業は難しい可能性がある。

E グループ：

学生

- ・学生が行う授業だけでは、必要なことが全て学べるのか不安である。
- ・下調べし、様々な情報を集めて行うディベートは勉強になった。
- ・報告されたような学生主体の授業を聞いてみたい。

教職員

- ・逆の立場になると反駁する論点を探すことによって反対意見についての考えについても理解が深まる。
- ・スポーツ健康科学部でもアクティブラーニング試みている教員もいるが、アメリカではプランナーやインストラクター、アナリストがいてやっている授業なので、報告にあったようなアクティブラーニングの授業は一人で行うことは難しい。アメリカ式のプログラムは3コマで1プログラムであり、日本では難しい。スポーツ健康科学部では院生などを使って、1科目1教員なので、やりたくてもできない現状がある。
- ・マインドマップは、情報同士のつながりがわかりやすく、地域に対する理解がいろいろな方向から理解

できた。

F グループ： 学生

- ・学習のプロセスでは得るものが多かった。実際に講義する立場に立って、教員の苦労も分かった。しかし、自分が担当した部分以外は身につけているか不安である。
- ・プレゼンするグループによって特色があり、映像の使用等など興味を引くグループでは得るものが大きい、分かりにくいグループでは試験前に確認に行かなければならず、教員の講義を望んでいる。
- ・高校まではグループワークがなかったため、大学ならではの取り組みである。

教職員

- ・反転授業におけるグループ内の差は、教員が補足することが必要である。これは全体とするのかグループとするのか考える必要がある。
- ・教員数が少なく、グループ内の深まりが把握しきれない。ファシリテータとしての力を発揮しにくい部分がある。
- ・学年の進度に合わせた授業設計が必要である。
- ・自分の意見を言える人、言えない人はいる。それらを捉えていくことは必要である。
- ・グループ間の関係性について、合う人合わない人は存在する。

2. アクティブラーニングの可能性と課題

A グループ

- ・反転授業は、全ての科目で行うのは学生と教員双方にとって負担が大きく現実的ではないが、少しずつ文化が育っていることで発展していくと考える。
- ・ディベートは、1 回の経験でできるわけではない。しかし、自分の意見を主張することよりも、相手の意見を聞くことの大切さを学ぶことができる。
- ・動画の活用は有効である。専門的な内容は、言葉のみの説明だと理解できにくいので、動画を用いても

らえると理解しやすくなる。

- ・どこからでもアクセスできるような ICT 環境を調整することが必要である。

B グループ

- ・今の学生の特性は「匿名性」の中で生きているため、自ら手を上げるのは恥ずかしい。現代の学生の特性を理解した上で、アクティブラーニングを工夫していく必要がある。
- ・課題に取り組むことが、いかに学生に面白いと思わせるか。学生の興味・関心を引き出して授業をすることがアクティブラーニングといえる。

C グループ

- ・発言できない学生が発言できるようになるためには、1 年生からグループワークを行っていくと発言ができるようになっていくのではないかと考える。
- ・基礎知識を講義で行った後、アクティブラーニングを行い、教員がまとめを行う。そこからさらに、課題や改善点を見つけ、次につなげていく。
- ・各授業の 1/3 回程度のアクティブラーニングは、負担も少なく有意義になるのではないかと考える。

D グループ

- ・アクティブラーニングは、学生が主体的に取り組めるように、講義の半分または一部だけに取り入れる。
- ・今回のような報告会を今後の講義に生かしていく。
- ・学生が学習の仕方や調べ方、学び方を学び、養うことができることが期待される。

E グループ

- ・教養ゼミのアカデミックスキルの 1 つとして図書の検索などをもっと学ぶ必要がある。
- ・本学ではアクティブラーニングは教員が主体的に取り組んでいる。
- ・どこからでも課題を提出できる環境をつくる必要がある。

F グループ

- ・グループワークでは否定的な意見を言いにくいケースもあり、結果としてみると誤った理解を示しているケースもある。教員からのフィードバックは重要である。
- ・ディベートでは立場が明確になっているため、反対意見は言いやすい可能性があるが、一步引いた客観的な意見を言うことができるよう練習が必要である。
- ・意見をぶつけ合う点において、学生にとってディベートの方がディスカッションよりもハードルが低い可能性がある。低学年時にディベートで論理的に話すことや自分の意見を話すための準備性の理解を進め、高学年でディスカッション的なグループワークへと段階的に訓練していくことも必要ではないか。

V. おわりに

本学の教員3名によるアクティブラーニングの報告は、本学の教員が取り組んでいるアクティブラーニングの実際を知ることができる大変貴重な研修会となった。また、その講義に出席した学生もFD研修会に参加しており、学生からの意見を聞くことのできる機会となった。

午後のグループワークでは、普段顔を合わせて意見を交換することの少ない教職員と学生が、意見を交換し合うことができ、参加者からも貴重な体験であったと好評であった。

今回の報告会及びグループワークを通じて、学生・教員ともにアクティブラーニングについて学ぶことができ、今後の看護教育活動に活用し、教育改善および教育力向上を図ることができる機会となった。